

認知症、でも 希望をもつて生きる—



—前田栄治さんの話—

どうとう来たか、と…

若年性認知症に関心をもっていたので大学病院で診断されたとき、「とうとう自分にも来たか」と意外に冷静に受け入れました。51歳の時でした。会社では、同じリズムで生活できるように勤務時間を考慮してもらいました。同僚は「定年まで来いよ」と励ましてくれます。

かくすことないべえ！

はじめは公表するのをためらいました。でも自分から病気であることを伝えれば、まわりの人たちも協力してくれます。「かくすことないべえ」と思いました。2カ月に1度の同じ若年性認知症の人たちとの交流が楽しみです。

私の望み

みなさんには、よく話を聞いてほしい。また、質問への返答は時間がかかるって待ってほしい。そして治る薬を早く開発してほしいです。

妻の美保子さん(左)は「その人の出来ることで、自信を持たせてあげて下さい」と話します。

「早期発見」と「正しい理解」で、その人らしく

認知症の人は、現在全国で200万人以上。30年後には385万人に達すると推計されています。前田さんのように65歳未満で発症した若年性認知症の人は現在約4万人と言われています。

早期発見をすることと、病気を正しく理解して適切な対応をすることは、その人らしい生活を続けるために大切なことです。最近では進行を遅らせる薬の種類も増えてきています。

■認知症の人の数（推計）



気が休まらない家族—「家族の会」の調査



「家族の会」の調査では、介護保険など認知症の人へのサービス充実もあり、20年前と比べると「外出できない」「自分の時間が持てない」という家族のつらさは減ってきています。しかし、「気が休まらない」というつらさはほとんど変わっていません。



認知症の人にも、家族にも「支援」が必要です。

介護する家族にもそれぞれの暮らしや生き方・大切にしたい人生があり、自分の健康や生きる喜びを大事にしながら、大切な家族である認知症の人との

時間を共有したいと願っています。認知症の人への支援がどれだけ充実したとしても、家族に対する家族支援が制度として必要です。



“認知症新時代”を進める

今年4月、世界保健機関(WHO)は「世界的規模で、認知症を国家の公衆衛生に関する優先的課題に」と訴えました。厚生労働省も6月に「今後の認知症政策の方向性について」を発表、認知症ケアの流れを変えると宣言しました。

これらは“認知症新時代”を進める動きと言えるでしょう。この動きを実現するためには、みんなが認知症の問題に関心を持つことが大切です。「家族の会」はこの流れが実現するよう、仲間が集まって助け合いながら、社会を良くする取り組みを進めています。